

グローバリゼーションのローカルな基盤

支配と対抗の両義性

一橋大学大学院社会学研究科教授

町村 敬志

はじめに

本日はこのような席でグローバリゼーションについてお話をさせていただく機会を得ましたことを心よりお礼申し上げます。私自身は都市研究という立場からグローバリゼーションについて考えてきたので、いわゆるグローバリゼーション論の全体について触れることはできません。しかし、普段からグローバリゼーションとローカルなものとの関係などにいろいろ行き当たることが多いものですから、今日はお話をさせていただきながら、改めていろいろ考える、そういう自分の機会にしたいという風に思っています。

このグローバリゼーションという言葉、今では非常に頻繁に使われている言葉ですので、ある意味では自明な言葉になってしまっているわけですが、現実はこの言葉をタイトルに入れた論文などを検索して見ていくと、当然ですけどそれほど古い言葉ではないことがわかります。例えば、日本の文献でいくと80年代より前にはほとんどこういう言葉は使われることはなく、80年代においても、グローバリゼーションという言葉ではなくて、例えば国際化とか違う言葉が実質的にこの言葉に代替する言葉として使われてきています。これは海外でも状況はかなり似ているという風に思います。また、グローバルな何々という言葉の使い方はあっても、グローバリゼーションという形で社会変動を語るということはそれほど一般的なことではない。例えば、国際社会学会が4年に一回開く世界社会学会議では、1990年の大会の

際にこのグローバリゼーションということが既にテーマになっていました。ですから、その意味では日本よりももっと早くからヨーロッパではこういったことについての意識が非常に強かった。けれども、それにしても80年代後半以降くらいである。こういう風に急に現われてくるカタカナ言葉というのはたいてい素性が怪しい言葉であることが多いわけで、グローバリゼーションという言葉の場合も、いわばファッションとして使われていますし、そこにこめられる意味も立場によって違う。それ自体一種のイデオロギー性を非常に帯びていることが多いことには十分注意をしなければならぬ。

「世界都市」研究の誕生

それらについてはまた後で触れるとして、この言葉が、例えば私のような都市を研究しているような人間にとっても、なじみになってきたプロセスにはいくつかの段階があったように思います。大きく80年代、そして90年代以降現在という風に分けていますが、80年代で言うならば、世界都市 グローバルシティと言ったり、ワールドシティと言ったりする についての研究がある時期生まれてきたということがありました。

その背景としては、第一に、国際的に流動する資金が増えてきたことがあげられる。すなわち、70年代の石油ショックの過程で石油の価格が大幅に高騰して、その結果オイルダラーというものが石油産油国に大量に蓄積され、それがヨーロッ

パなどに還流してきてユーロダラーになり、アメリカではなくてヨーロッパで流動しているアメリカドルという形で国際市場をうろうろするようになってきて、それをどういう風にご利用するかというような流れの中で国際金融市場というものが本格的に成立してくる。それから言うまでもなく、背景のもう一つ大きな点として、コンピュータによる情報処理能力が大幅に高まっていくにつれ、国際金融・資本市場というものが大きく展開してくる。そういう背景があってグローバルという言葉がしだいにリアリティを持ってくるという背景があった。

それから、都市の側にも、グローバルなものと比較的早く結びつく条件があった。一つは、福祉国家体制のもとでほとんど地方自治体や国家の財政支出が増大していった結果、70年代の資本主義の全般的な危機のもとで、財政危機状況が訪れてくる。財政危機ないしその背景にあった産業衰退というものを総称して都市危機と70年代半ばあたりに言われていたわけですが、それをどう乗り切るか、つまり都市再生の戦略が世界の大都市の中で模索されていた。とりわけロンドンとかニューヨークといったような都市の中で、再生戦略の一つの形として国際金融センター化ということが打ち出され、それを進めるためのキャッチフレーズとして世界都市という言葉が、政策上の言葉として使われるようになってきたということが70年代の末、80年代の初頭にありました。

それからもう一つ、移民、国際労働力移動というものが増加してきて、その流れがいわば集まる結節点として世界の大都市というものが新しい特徴を帯びてくる。ニューヨークとかロンドンとかロサンゼルスとか、そういった都市を中心に新しい状況が起きてきた。先進国社会のいわば豊かさの中心に、移民労働者が働く非常に劣悪で低賃金で環境状況の悪い労働現場が生まれてくる。言ってみると先進国の中心に第三世界というものが生まれてくる。こういう状況を研究者や実践運動家たちが再発見していく。この矛盾をどういう風に

理解していくのかということが、いわばグローバルな流れとローカルな流れをつなげていく研究の一つの現実的基盤になっていったわけです。

研究者としては、フリードマンというもともと途上国の開発論をやっていた都市計画学者が、グローバルな変動と都市の変動というものを結び付けていく発想のもとで世界都市の仮説を提示し、さらに、S. サッセンが、ロンドンとかニューヨークとかロサンゼルスといった都市の研究を踏まえながら、労働力移動と国際金融センターの形成という、一見かけ離れた現象の間の見えない連鎖のようなものを論理的に明らかにしていった。そこで、世界経済にサービスを提供する拠点としてのグローバルシティというものが生まれてきた。ただし、それは専門サービスのようなものだけを生み出したのではないというのが非常に重要な点です。サッセンの引用は次のとおりです。

「……生産過程の技術的变化、国内および海外の低開発地域への製造業の移転、そして企業経営における金融部門の地位上昇、こうしたことすべてが、新しい性格の経済的中心、つまり世界経済を運営するとともに世界経済にサービスを提供する拠点としての世界都市(global city)を確立する役割を果たしたのである。……専門的サービス産業の実態を検討するうえで重要なのは、金融パッケージとか技術的助言とかいった最終生産物だけでなく、専門家から彼らが働くビルの清掃人にいたるまでの、それら最終産出物の生産にかかわるすべての仕事なのである。こうしたサービス部門の拡大は、高所得の職種と低所得の職種との両方の増加をもたらしてきた (Sassen, Saskia(1988=1992)『労働と資本の国際移動 世界都市と移民労働者』(森田桐郎ほか訳)岩波書店、179-180頁)」(下線は引用者)

専門的サービス産業の実態を検討するうえで重要なのは、金融パッケージとか技術的助言とかいった最終生産物、これを生産するのはいわばエリート層になるわけですが、それだけではなく、彼らが働くビルの清掃とか、あるいはさまざま

まなサービス産業、レストランとか、ホテル産業とか、バイク便とか、そういった諸々の仕事が全体としていわば金融センターというものを成り立たせている。したがって、こういうサービス産業部門の拡大というのは、高所得の職種のみならず、さまざまな低賃金職種の両方を増加させていく。結果的に階層の分解のような現象が最も豊かな都市を中心において起きてくる。そういう論理で先ほど述べた大都市の状況を説明しようとしたという研究上の経緯があったわけです。

このあたりまでが80年代の状況で、これを受ける形で日本でも、あるいはアジアやヨーロッパ、その他の都市でも同様の現象が果たして起きていないかどうかを検証する作業が進んできました。私自身も東京についてこういう仕事をやったのが研究の一つの出発点でした。

これらは言ってみると、まだグローバル・ローカルという問いには完全になっていないわけですが、グローバルな変動と、都市レベルの変動、ローカルな変動というものをいわばつないでいくことの必要性については、確かに認識が広がっていった。そこで国家がどういう風に関わっていくかということが、ここではまだ十分認識されていないわけでありましてけれども、いずれにせよそういう一つの方向を切り開くきっかけになったわけです。

ちなみに、もともとフリードマンとかサッセンはこのグローバルシティ概念を現状に対する批判を込めた言葉として使っていたわけですが、これを読んだ行政家達、シンクタンクの人たちは、グローバルシティを批判的な言葉としてではなく、先ほど述べた都市の再生、あるいはグローバル経済に適応した都市をどうやって作っていくかという場合の、いわば計画上の理想として使うようになっていく。それにつれて、世界都市という言葉自体が一種のイデオロギー性を帯びた言葉として、計画や政策の文脈の上で非常に多用されるようになってくる。そして、それが世界中で模倣されてきました。その意味で、グローバル都市の

形成というのは、それ自体非常に政治的な色彩を帯びた過程でした。

グローバル化の新しい動き

ところで、1990年代に入る前後ぐらいからいくつかの新しい状況が生まれてきました。それとともに、グローバル化論というものがより浸透していく。それだけではなくて、さまざまな領域や地域にこの議論が拡大して解釈されていく。そしてグローバル・ローカルという形での問題の定式化が本格的な形で起こってくるというのが、90年代に入ってからだだと思います。例えば、転換の背景としては第一に、89年あるいは90、91年あたりの大きな変化として、冷戦の終結という事柄があります。その結果、人や情報やものの流れを仕切っていた大きな東西の壁が崩れ去っていく。それだけではなくて、結果的にアメリカ極集中の構図というものが経済を中心にはっきりしてくる。こういう状況のもとで、グローバル化論が新しい意味合いを持っていくというのが第一点です。

第二に、経済のグローバル化というものが進展していく。これは今述べた点と重なるわけでありましてけれども、市場競争というものが旧社会主義国も含めて、さらに勃興する東アジア、東南アジアも含めてまさに全世界的に展開するようになっていく、あるいはそういう認識が広まっていく。

それから第三に、これは徐々にその影響の大きさが認識されてきたわけでありましてけれども、インターネットとかいわゆるIT革命と言われるような科学技術のインパクトがあります。これについては、過大評価だという意見と、それからやっぱりこれはすごいという意見、両方あってまだ見通しがよくつきません。けれども今の時点でいえることは、80年代における情報通信の技術の発達、企業を中心としたデータ通信に基盤を置いた革命だったとするならば、90年代の場合には

やはりインターネットに代表されるような、個人を単位としたメディア空間が大きく作り変えられていく革命であった。80年代と連続はしていますが、それが持つインパクトという点ではかなり違っているように思います。新しく生まれてきたパーソナルなメディア空間というものが国境を越えて成立しようという状況のもとで、グローバリゼーション、あるいはグローバルとローカルの関係がどう変化するのか、これは今日、非常によく問われている点かと思えます。

それから四番目に、国際労働力移動とか移民の問題があります。これは以前から連続する現象ではありますが、80年代の半ば以降、移民の受け入れに対するさまざまな抵抗や反対が、例えばヨーロッパ諸国、そしてそもそも移民国家として成り立ってきたアメリカにおいてすら、強まってきている。グローバリゼーションが進行していく、とりわけ人の流れが広がっていくにつれて、それに対していわば反動的な動きというものがさまざまな形で目に見えてくるという変化があった。そういう状況を受けながら現在の大きな流れが生まれているように思います。

グローバリゼーション 「単一化された想像上の空間」の形成・浸透過程として

さて、ここで私なりのグローバリゼーション理解について、やや抽象的ではありますが、整理しながら述べておきたいと思えます。

グローバリゼーションというと、これまでとかく、例えば地球を遠巻きに眺めて、それがぐるぐる回っていくようすを、いわば上から下へと見下ろしていくようなイメージで語ってしまうことが多かったと思います。しかし実際にはグローバリゼーションという変化とは、ローカルなレベル、あるいはナショナルなレベル、あるいはリージョナルなレベル、それぞれの変化の集積、そういったものの積み重ねを通じてしか起きない現象である。またそういう意味で、グローバリゼーション

の現場というのは徹底してローカルやナショナルな領域なのだという風に考えていく必要がある、そうでないと非常に危ない議論になってしまうという印象を持っています。グローバリゼーションとはローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルといった異なる領域組織化モードに準拠する多様な主体の間の競争とか対立とか協力を通じてその形が与えられる、きわめて政治的な過程である。抽象的ではありますが、こういう側面で考える必要があると思っています。

その場合、もう一つ、現在の社会を作り上げていく力として、いわば特定の場所を離れてさまざまな回路、ネットワークを使いながら脱領域化していくようなモーメントの力が働いていることに、目を向ける必要があります。特定の場所、あるいは特定の国家ではなくて、境界を乗り越えて新しいネットワークを作っていくことによって、新しいビジネスが生まれるとか、新しい市民社会が生まれるという側面です。

実際には、グローバルな関係性に何らかのリアリティを感じる人もいれば、それにまったくリアリティを感じない人もいます。大きな流れとしては、人々は確かにつながり、相互依存が増しているわけですが、しかし、それをあまり強く考えすぎると、非常に誤ったグローバルの像を抱いてしまうように思っています。その意味で、グローバリゼーションというものを、ゆるやかに「単一化された想像上の空間」の成立という風にまず考える必要があると考えています。

この単一化された想像上の空間というのは、言ってみるととても弱い物語や、断片的なエピソードでしかまだ語られていない。例えば、近代社会のもとでは国民国家という非常に強い「想像された共同体」が作られてきたわけです。何百万もの人たちがこの「想像された共同体」としての国民国家のために、その犠牲として死んでいった。しかし、今生まれているグローバルな空間のためにすすんで死んでいく人はあまりいないでしょう。つまり、それほど強い物語をこのグローバリゼー

ションは生産していないわけです。ただし、国民国家がちょうど想像の共同体であったのと同じような意味で、グローバリゼーションもまた、想像力の産物であるということを、まず第一に強調しておきたいと思います。これが第一点目です。

二番目は、領域についての議論です。グローバルな社会の中には、さまざまな人間や情報やものが散在している。それらの中にどういふ風に関係が生まれ、どういふ風に境界が生まれていくのか。この点が、現在の大きな議論になっている。こうした結びつけや境を生み出す空間的単位として国家、国民国家というものが圧倒的な力を誇っていることは、言うまでもありません。ただし、大きな流れとしては、国民国家、国家の領域構成力というものが低下していく。その代わりに、新しい主体とか新しい空間が台頭してきている。最近では、尺度を作り直すという意味で「リスケーリング」という言葉がよく使われているようですが、そういうリスケーリングが進行している。どういふスケールで社会の空間的領域を作り直していくのか。政治過程ですから、作り直された尺度のもとで誰が新しい単位の正当なメンバーになるのか　つまり市民権　、また誰は正当なメンバーではないのか　つまり排除　という判断が生まれてくる。こうした過程が、国家だけではなく、もっと多様なレベルの単位について生まれてくる。逆に、既存の領域を越えて単位をつないでいく側に立つとするならば、新しいリスケーリングの動きのもとで、新しい共通の基盤、連帯の基盤をどう作っていくのかということが大きな課題になっているように思います。

三番目の点として、こうした領域形成の多様な力の中で、資本、市場経済の力が、非常に優越的な力を及ぼしていることは、よく言われている通りです。グローバリゼーション＝市場経済化という思考方法が浸透し、かつ優越化していく傾向は非常に強い。その結果、まだこれにはいろいろな議論があるようですが、グローバルに展開する資本をコントロールするエリートたちが、新しいト

ランスナショナルな資本家階級として勃興してきている、というような研究なども生まれてきております。

この経済優先のグローバリゼーション、あるいは市場万能型のグローバリゼーションが優越していくという発想のもとで、結果的に起きている事柄というのが、経済や市場の変化に合わせて個別の社会や文化というものを作り変えていく必要があるという主張です。そうでないと競争に生き残っていけない。あるいは、伝統的な社会や文化には不適合というネガティブな評価がなされて、それを「グローバル・スタンダード」に変えていくのが正しい方向だとする考え方が生まれる。「構造調整 structural adjustment」という言葉がここでは使われています。

日本の場合も1986年、いわゆる前川レポートが作られて、そこから構造調整という言葉が本格的に使われるようになってきているわけです。しかし、そういう言葉は日本だけではなくて、世界中で使われています。意味としては、グローバル経済に合うように個別国家やローカルな社会というものや文化を作り変えていく、もっと言うと人間そのものも作り変えていく、という発想です。その一つの現われとして、ネオ・リベラリズム的な市場主義の台頭によって、従来福祉国家体制のもとで整備されてきた国家とか地方自治体を単位とするような調整のメカニズムが骨抜き化されている。代わって競争主義というものが企業間のみならず個人間や地域都市間、国家間で強調されるようになってきている。

四番目の点として、こうしたグローバリゼーションの動きが、ローカルなレベルの政治過程、政治的表象を介したローカルな動員によって支えられていることを主張したい。例えば、今まで述べてきたようなグローバリゼーションという言葉から自ら意識的に使う人たち、あるいはグローバリゼーションと自分がつながっている　その強さはともかくとして　と思っている人たちというのは、社会全体で言えば必ずしも多数派とは限らな

い。グローバリゼーションやグローバルな想像上の空間に行為の立脚点を強く置くような社会層というのは、現状においては少数のしかもエリート層であることが多い。

ただし、グローバルな領域に行為の立脚点を置く社会層というのは大きく2つのグループに分けられる。一方には、いわゆる経済的なグローバリゼーションを推進していくグループがある。他方には、反グローバリゼーションの立場がある。近年、反グローバリゼーションの運動が高まりを見せているわけですが、反グローバリゼーション運動は、グローバリゼーションを批判しながら、しかし同時にリアリティというものをグローバル派と共有している一面がある。グローバルな反グローバル運動というわけです。これに対して、反グローバリゼーションもグローバリゼーション推進も含めて、そういうリアリティから縁遠い、いわばきわめてローカルな社会を生活している周辺的な人々が、どの社会においても少なくない。

グローバリゼーションの政治においては、この想像上の空間というものを共有していない層をいかにして味方に引き入れるかが、重要なポイントとなる。グローバリゼーション推進派であれば、グローバリゼーションの利点をそこで強調するでしょう。反グローバリゼーションであるならば、グローバリゼーションがもたらすさまざまな問題点を強調する。それによってローカルなレベルあるいは国家レベルで、グローバリゼーションの政治というものが展開している。こういう政治的な綱引きの過程においてさまざまな言説や表象、イベントが利用され、グローバリゼーションという「物語」というものが展開される。そうした物語を利用しながら、人々の行為を動機づけていこうとする動きが展開しています。

以上の見方をもう少し、補足しておく必要があるでしょう。われわれが今、目にしているグローバリゼーションには、いわば、実体としてのグローバリゼーションと、言説としてのグローバリゼーションの両面があります。現在の議論はといえ

ば、とにかく実体的な面ばかりを強調する傾向が強いというのが、私の印象です。では、実体としてのグローバリゼーションとは何かということになると、これが非常にあいまいなのです。遠くはなれた人たちが、私も含めて、何かの形で相互に関係しあっているという認識は強まっています。それ自体は事実ですから、その意味では実体としてのグローバリゼーションというのは進行しているのだという風に思います。けれど、あいまいなまま、グローバリゼーションを実体として考えていくとき、あらゆることが闇雲にグローバリゼーションの帰結として語られる傾向を招いてしまっています。しかも、グローバリゼーションという考え方は、その定義にしたがうと、つねにその語り手自身に回帰してくる議論、べつの言い方をすれば、「外部」の存在を許さない議論という性格を持っています。

そうだとすると、グローバリゼーションを相対化しようとするとき、このあいまいさの問題は大きな壁になります。一度同じ土俵にのってしまったら、逃げ場がなくなってしまう危険性をはらむ議論だと、グローバリゼーションのことを思うわけです。そうしたとき、グローバリゼーションというものが、実際には、それ自体、様々な形による想像力の産物として作られていることに一度立ち返ることに、積極的な意味が生まれてくる。特定の想像力だけに飲み込まれてしまわないように、グローバリゼーションに穴を空けておくといったらよいでしょうか。言い方を換えると、グローバリゼーションを自明視せず、グローバリゼーションという言説そのものの成り立ちを、さまざまな角度からもっと対象化して考えていく必要がある。同じ土俵にのらないけれども、グローバリゼーションという事実そのものには背を向けない。そのためにはどういう風にグローバリゼーションを語ったらいいのか。そうした試行錯誤が、先ほどの議論の背景にはあります。

グローバリゼーションとその社会的影響

「私たちは、切迫した気持を共有している。このままでは日本は衰退していくのではないかとの不安を抱いている。それほど、日本を取り巻く環境と日本そのものの環境は厳しさを増している。」

「グローバル化（グローバリゼーション）はもはやプロセスではない。それはれっきとした現実である。」

（「21世紀日本の構想」懇談会『日本のフロンティアは日本の中にある 自立と協治で築く新世紀』2000年）

ここにあげたのは、グローバリゼーション推進派による最近のレポートからの引用です。亡くなった小渕首相が1999年に作った「21世紀日本の構想」懇談会のレポートで、これは、英語第二公用語化論で非常に話題になりました。その基盤にあるのは、グローバリゼーションというものを避け難い大きな流れとして捉え、その上でグローバリゼーションに対応していくための新しい基盤をどうやって作っていくのか、とりわけ、グローバリゼーションに対応する人間像や文化、生き方をどのような形で作っていくのか、という発想です。

対照的に、反グローバリゼーション論という議論もあります。そこには、区別しなくてはならない議論がたくさん含まれています。一つはグローバリゼーション＝市場万能主義というように捉える立場で、市場万能主義としてのグローバリゼーションに反対する（たとえば金子勝）。市場主義に回収されてしまわないような新しい共同性の基盤を重視する、あるいは国家や政府の役割というものを改めて見直すというような方向で、議論がすすみつつあります。それからもう一つ、マスコミ受けする点でよく指摘されるわけですが、グローバリゼーション＝アメリカ中心主義という形、あるいはアングロサクソンのグローバル・スタンダード中心主義と捉えて、それに対する反論として展開される反グローバリゼーション論がある。反アメリカ主義、さらにナショナリズムへとつながる視点でもあります（たとえば、石原慎太郎）。

反グローバリゼーションという点で、金子氏と石原氏は時としてほぼ同じ内容を語ることがある。しかしよって立つ基盤は全くと言っていいくらい違っている。そういった違う立場であるのに関わらず、結果的に語る内容がある部分で類似してしまうことは、否定のできない点であり、かつ非常に重要な問題だと思います。

また、グローバリゼーションという状況から新しい対立とか不平等が生まれる可能性がある。経済的なグローバリゼーションのもとで分極化が起きるといふ議論は、これまでもデュアリズムとして指摘されてきた。社会的な排除の問題、社会における周辺層というものが新たな形で生産されていく。しかし、これらをすべてグローバリゼーションと短絡してしまうのも、今の議論の流れからいって非常に危険です。実際には伝統的な要因、国内的な要因で生まれている不平等が多いわけで、グローバリゼーションの強調は、かえって本来の原因を覆い隠してしまう効果をもってしまう。この点は、もう少し注意が必要です。

そして、階層化との関係で、世界都市における新しい動機づけの問題を指摘することが出来ます。その準備としてここで簡単に、東京都政のグローバル認識を振り返ってみたいと思います。引用したのは、東京都が作った長期計画における「都市認識」にあたる部分です。

「二一世紀において、東京は、一二〇〇万人を超える人々が暮らす大都市、世代をこえてふれあいとささえあいに満ちた活気ある都市、豊かな緑とうるおいのある水辺の溶けあう快適な都市、そして、内外の情報結節点、世界経済の一大拠点としての機能を担いながら職と住の均衡のとれた都市として、一層の発展をとげていく。これこそ、名実ともに世界をリードする魅力ある国際都市、すなわち世界都市としての東京の姿である。」（東京都『第二次東京都長期計画』（1986））

これはバブルのちょうど始まった時期、鈴木都政の頃に発表されたもので、この頃あたりから国際化とか世界都市というような言葉が使われる。

まさにイデオロギー的な表象として使われてくるわけです。ただし、この時点における国際化とか世界というのは言ってしまうと、成長する日本や東京が新しい拠点として活躍すべき舞台といった意味しかなく、非常に楽観的で平板な世界だと表現できる。それが1990年代になり、バブルがはじけると、言葉の正しい意味での経済的なグローバル化というものが日本にも押し寄せてくる。そういう流れの中で東京都の認識が次第に変わってくる。

「今後、東京の人口は、緩やかに減少し、高齢少子化が一層進んでいきます。経済も、総じて安定成長が続くものの、国際競争の高まりや情報ネットワーク社会の進展により、産業構造や就業構造などが大きく変わっていくものと思われまます。内外の諸都市や市民の交流が活発化する都市の時代にあって、これからの東京は、限りある地球環境を大切にしながら、生活の質的な充実や地域の個性を重視し、諸機能のバランスのとれた都市づくりを進めていくことが重要になります。」(東京都『生活都市東京構想』(1997))

これは青島都政のもとで作られた長期計画にあたる。このあたりから国際競争の高まりの中で都市というものをどのようにしていくのか、という視点が盛り込まれる。ただここでは、「生活都市」が中心テーマであるということもあって、グローバルではなくローカルなレベル、あるいは都市レベルの問題に大きな関心であった。ところが2000年、石原都政がスタートしてから以降、都市政策を位置付けていく社会的文化的コンテクストの理解が非常に変わってしまう。

「今日の時代潮流のなか、国際的な都市間競争が激化している。都市間競争に伍していけるだけの魅力をどれだけ備えているかが、都市の存在を左右すると言っても過言ではない。近時、とりわけアジアの諸都市と比較して、東京の地位低下が指摘されている。都市づくりにおいて、国際都市としての魅力を高める視点から取り組むことが極めて重要な要素になるものと考えられる。」(東京

都『東京都都市白書』(2000))

2000年の東京都都市白書にもあるように、今日の時代潮流のなか、国際的な都市間競争が激化している。都市間競争に伍していけるだけの魅力をどれだけ備えているかが、都市の存在を左右すると言っても過言ではないとされる。

「経済のグローバル化が進み、国際的な都市間競争が激しさを増す中、国際的な魅力や競争力をもたない国や都市は、衰退の危機に瀕せざるをえず、行財政改革、産業構造改革、金融改革、企業組織のリストラクチャリングなど、社会経済全般の構造改革が求められている。」(東京都都市計画審議会「都市づくり調査特別委員会」『中間報告』(2000))

この東京都都市計画審議会委員会の報告では、経済のグローバル化が進むもとの、国際的な都市間競争が激しさを増す点が特に強調される。そうした中で、さまざまな改革やリストラを進めていく。その先頭に立っていく役割を自治体である東京都が担っているのだ、という言い方になる。あるいは、石原知事流の言い方をすれば、日本を変えるためにはまず東京を変える必要がある、東京を変えるその先には日本が変わるというニュアンスが、そこには込められてはいる。

結論から言うと、私は都市が競争するということはありえないと考えています。確かに、都市が競争するというように考えている人はいる。そして、都市が競争しあうことによって得をしたり損をしたりする人もいる。けれども、都市自体が競争することはない。あるいは、別の都市に住んでいる住民どうしが競争関係に陥ることにはない。にもかかわらず、都市間競争というものが語られて、実際問題としてそれによって経済的な活性化とか衰退とか起きたりすることは事実なわけです。あるいは、そういう風に思考する回路に人々が追い立てられてしまう。都市間競争を自明としてそれに向かって政策をつくったり、あるいはそれを当たり前だと思ってしまうような文化的仕掛けじたいを、もう一回考え直さなければいけない。

こういう状況のもとでもう一度、鈴木都政の頃とはちょっと違った意味ではありますけれども、グローバル化と都政というものを接続化していくという動きが強まっているわけです。

人々を動機づけるイデオロギーとしてのグローバル化

現在のグローバル化の議論は、基本的に、経済的なバイアスを強くもっています。これがローカルな文脈に移植されると、それは、経済的な問題よりも政治的・文化的な問題へと転化していく。グローバル化という想像力のもとで、どういう人間が作られていくのか、あるいは作られてしまうのか。あるいはもう一步進んで、より積極的にどういう想像力を持った人間を作っていくべきなのか。このあたりが、政治的な争いの中心となる。

東京都の作成した文書を見ても、世界都市や国際競争を生き抜くような新しい人間をどうしたら動機づけていくことができるか、というニュアンスの表現が多い。今日本は非常に不景気ですし、いろいろな意味で冷たくなっている。そういう状況のもとで、どうしたら人々に熱くなる動機を与えられるか。別な言葉を使うと、頑張り続けていけるような人間を作れるか。あるいは加熱していけるのか、ということが課題になっている。先ほどの小淵元首相の懇談会でも、結局のところ、どうやって人々のやる気を出させることができるのか、ということが非常に大きなポイントになっている。

ただし、実際にはこの「動機づけ」問題に対する支配的システムの側の対応は、ケースによっていろいろな形を取っている。

第一に、例えば多国籍企業などにおいて、まさにグローバルな文脈で活躍するような人々が、ごく少数だがいる。これまでは大企業に入れば何となく全員がそういう風な位置づけであるように錯覚していたわけですが、現在では大企業の中

でもかなり早い時点で、グローバルに活躍する人材とそうではない人材に大きく区別がされはじめている。企業社会の中でも、トップ層の人材というのはより一層動機づけを強められていく。そのためには、より大きな「リスクを取っていく」ことを求められる。それに合わせて、そうした人間には、従来とは比較にならないような大きな報酬を与えていくようなシステムが採用されつつある。いわば挑戦し続ける「パワーピープル」。これは、汐留に建設中の超高層マンションが発行した宣伝パンフレットのうたい文句なのだが、どうやってつくるか。こうした課題設定が、トップ層の議論としてあるわけです。先ほどの「21世紀の日本構想」懇談会が問題にしている動機づけの話も、こうした層については確かにリアルな響きをもっていると考えられる。ただし、繰り返しになりますが、こうした「パワーピープル」は全体から見れば一部の限られた層であるにもかかわらず、そうした層の競争を促進するような言説が、もっと幅広い層に向かって投げかけられてしまっているところに、誤解を生み出すひとつの原因があると考えられる。

今のが言ってみると一番のエリート層だとするならば、第2に、その次の層に向けた動機づけの議論がある。たとえば、これまでは企業社会の中に組み込まれていたものの、次第にその内部で選別されていく層、あるいはこれから企業社会に入っていくもの、さまざまな理由でトップの競争にはもう加わっていかない選択をする層が増加していく。それまでの非人間的な労働環境を考えれば、これは、ある意味で非常に人間的な選択をしているともいえるわけです。しかしながら、現在のところ、こうした層は、競争を降りた時点で、かっこ付きの「敗者」になってしまう。そしてこうした「敗者」層は、リストラや人事制度の変化によって、ますます増加する傾向にある。この膨大に生まれてくる競争の「敗者」を、どうやって穏やかに退出させ、正当な居場所と社会的評価を用意していくのか。このことは変化する現

在の都市社会において、最も大きな問題のひとつだと思います。先述の金子勝氏などにせよ、また政府の議論にせよ、こういう「敗者」層にむけて、セイフティ・ネットをどうやって用意していくのか、という議論が一方でなされています。これは議論としてはもっともだと言えますが、しかしその前にまず、生活者としての「納得」、生き甲斐をどう提供するか、という議論が欠かせない。

しかも実際には、この「敗北」層にとって可能な選択として、しばしばきわめて孤立化された解決が選ばれるということになってしまっている。例えば中高年の自殺者数が一気に50%も増えてしまうという異常な出来事が98年に起きて、その後もそうした傾向は続いている。いわば、自ら死んで得た保険金でセイフティ・ネットの代わりをするというような悲惨な状況が生まれかねないし、現に生まれている。そういう状況の中でどうやってセイフティ・ネットを作るのか、という問題が実際にはあるわけです。

さてここまでみた二つのグループは言ってみると、仮にかっこつき「敗者」であったとしても、競争という価値自体を少なくとも一度は受け入れている層にあたります。それに対して三番目というのは、そもそも競争自体に背を向けてしまう層、とりわけ若者が多いわけですが、そもそも競争に熱くならない層が生まれてくる。決して「冷たい」とか、「やる気がない」とは限らないのだが、しかし従来の競争中心の価値観の尺度で測ろうとする大人から見ると、どうしても「熱い」ように見えない層がこれにあたる。そういう「熱くならない」層を、どうやってもう一度既存のシステムに編入していくか。少なくとも集団的な「反乱」や「反抗」が起きて、システム自体が破壊されないように、こうした層をいかにしてある一定のところへとどめておくのか。こうした問いが、もう一つ大きな課題としてシステム側にはある。こうした問題がもっとも露呈しているグループの一つは、いうまでもなく若年層、とりわけ中高生やフリーターなども含めた若者たちで、そうした層の生き方

論という形で問題は議論されてきている。

東京都の場合には石原都政になってから、「心の東京革命」という新しいキャンペーンが始まりました。子どもたちに、いわば大人社会の価値観というものをもっと厳しくしつけて身につけさせていく。キャンペーンの中で言われている内容は、たとえば「他人の子供でも、悪いことをしていればしかる」などといったもので、それぞれはもっともなもの多く、私などもつい賛成してしまうわけですが、ただそれを「心の東京革命」という名前を付けて、上からのキャンペーンで浸透させていくというやり方については、違和感を覚えずにいられません。そもそも、そんなキャンペーンが有効性を持つとは誰も思っていないし、私も思っていない。その程度のことでも世の中が変えられるのならば、とっくによくなっているもおかしくないわけです。けれども、閉塞した事態を変えていく回路として、教育問題とか、あるいは心の問題をとりあげ、それに問題を大きく転嫁していってしまうという発想が広がっていることは、憂慮すべき傾向といえる。どの時代もそうですけど、景気が悪くなると一つは経済の議論が多くなるわけですが、もう一つ、不満のはけ口として教育問題とか「今の若者はだめだ」といった話が持ち出されることがよくあるわけで、現状はまさにそういう状況に当たっている。実際に問題があることは事実としても、それを今述べたような本質回避の回路に持っていかないような方策がどこにあるのか。このことが、都市政策のレベルでも非常に重要ではないかと今考えています。

動機づけの議論の最後として、もう一つ、外国人労働者の存在についてふれておきたいと思います。世界都市化とも関連して、1980年代後半より東京でも、外国人居住者が増加してきました。これまで、外国人労働者というと、低賃金労働力として、安い賃金で悪い労働条件の下でも働くといったことが言われてきました。しかし、別の見方をすれば、外国人労働者というのは、言ってみると「加熱済み」の労働者として入れられている。

つまり安い賃金でも、条件が悪くても、みんな頑張っている。だからときには、きつい労働を避けたがる日本人の若者に向かって、「悪い条件でも頑張っている外国人労働者を見習う必要があるんだ」という言い方にも使われたりする。そういうことも含めて、「加熱済み」の労働者としての外国人労働者を「輸入」しようとする動きはこれまでも多かったし、これからもその傾向が強くなっていく可能性は大きいわけです。ただし、これは外国人労働者あるいは外国人に対する一種の偏見にも基づいている。頑張っているから、悪条件でもよい、ということには決してならない。また、外国出身の人々のすべてが、「加熱済み」であるわけでも、もちろんない。実際にはさまざまなタイプの人々が含まれているし、これから日本における滞在期間が長くなっていくにつれて、日本人の場合と同じように、さらに多様な価値観を持つようになっていくことが予想される。「外国人労働者＝頑張っている労働者」というような見方を安易にとると、結果的に規格化された外国人だけを受け入れて、それ以外の外国人は排除していく、というような論理に転化したり、あるいは排除をすすめるための方便に使われかねない部分がある。

以上、動機づけの問題を中心にしながらお話をしてきました。グローバル化と都市政策の関係を、都市生活者の内面への介入という観点からもう少し考えていきたいと、個人的には考えております。

グローバル化（イデオロギーとしてのグローバル化）に対するローカリズムの可能性

さて、あまり結論にはなりません、まとめに入りましょう。今回のお話をいただくときに、グローバル化に対してローカリズム、あるいはグローバル化に対してローカリズムというのはどういう風な可能性を持っているのか、という問いをいただきました。大きなテーマでもあり、それに対する答えは今手元にはないのです

が、何点か考えて参りました。

一応、表現を最初に整理しておきましょう。グローバル化というのは、一種のイデオロギーとして、グローバル化促進を主張する対場を指します。これまで述べてきたとおり、グローバル化自体、言説や想像力の作用として作られているわけですが、それを特にこうあるべきだという強い意図を込めて使うときに、グローバル化というのはグローバル化になるわけです。それに対抗する、つまりイデオロギーとしてのグローバル化に対抗する立脚点として、ローカルな現場というのがどういう形を取りうるのか。そういう意味でローカリズムを考える立場が議論としてやはりありうるし、私のような都市をやっている人間にとってみると、それはとても大きなテーマになるわけです。ただ、その場合にローカリズムというものが、いろいろな文脈で使われているということは、あらかじめ見ておく必要があります。

ローカリズムを日本語にむりやり翻訳すると、地域主義というよりは、むしろ、局域主義というのでしょうか。広がっていくようなムーブメントではなくて、自分の生活する基盤や身体を中心とした領域に、物事を収斂させて考えていくような、そういう発想法といったらよいのでしょうか。そういう意味で、必ずしもローカリズムの行き着くところが地域というわけではなく、もうちょっと今は多様に使われているように思います。

ローカルな領域というものは確かに可能性を持っている。けれども、ローカリズムというものは非常に多義的な存在です。ここでは三つの見方を挙げておきたいと思います。

第一は、ナショナリズムに対して「脱ナショナリズム化していく力としてのローカリズム」という考え方です。近代社会において国民国家の想像力は非常に強力であったわけで、ローカリズムの意味も、この脱ナショナリズムという方向性がもっとも一般的だったように思います。国民国家の枠にとらわれないローカルな拠点として、自分達

の生活世界というものをどうやって作っていくのか、ポイントはここにあります。

第二に、グローバリゼーションがどのように大きく展開してくる中で、グローバリズムに対する反グローバリズムあるいは脱グローバリズムの拠点を作るための思想的な源泉として、ローカリズムというものが語られている。グローバル対ローカルという対比は、90年代以降、非常に頻繁に目にする視点となりました。

それから、三番目として、やや抽象的な議論になってしまうのですが、領域化する権力に対抗するものとして、「脱領域化を経由した再領域化としてのローカリズム」という視点がありえます。ナショナルにしてもグローバルにしても、あるいはまたローカルにしても共通に言えることというのは、人々が生きる世界というものを一つの完結したユニットとして考えていく。その上で領域の中に閉じこもっていきこうとする。領域を作るということは別の言い方をすれば、境界を作って、境界の内と外を分けてしまう。そうした場合に、境界の内側にある異物を排除するという契機が、しばしば生み出されてしまうわけですが、そういう領域化の力に対抗するものとして、ローカリズムというものを考えていく、というものです。領域化するローカルに対抗する再領域化としてのローカル、ということですから、一歩まちがえば、これは矛盾してしまう内容を含んでいます。先にのべたように、社会構成にあたって、領域化しようとする権力に対抗して、いっぺん脱領域化をする。従来のような内向き主義ではなくて、もっと四方に伸びていくようなネットワークを広げていく。そういう方向性の中で、新しい居場所を作っていきたい。けれども広げる一方ではやはり居場所を作れないわけで、居場所という言葉が表しているとおりやはり「場所」は必要なわけです。人間の体が生身の身体である以上は、ですから、一回広がっていった上で、もう一度どこかに「場所」を作る必要がある。ここでは、「再領域化」という言葉しかなかなか思いつかなかったわけですがけれ

ども、そういう意味で、ちょっと矛盾はしているのですが、ローカルな現場をもう一回作っていきこうとする動きがある。

例えば、インターネットを中心として新しい公共圏というものを、メディアを立脚点に作ろうという動きが今いろいろ模索されています。インターネットによって保証されるような「世界」というのは、脱領域化した上でもう一回再領域化する居場所を作ろうとする試みとして、比較的わかりのよいものかもしれません。しかし、われわれはインターネットの世界の中だけに住むことはできません。常に我々は生身の身体を持って現場を生きていますから。ですからホームページ上、あるいはインターネット上だけですべてを解決することは当然できないわけです。再領域化をどのような基盤の上に構想するかは、とても大きなテーマだと思います。

もう一点、ローカリズムを論じるときに忘れることが出来ないテーマがあります。それはローカリズムの評価に関わる問題です。いまここでは、文脈上、ローカリズムを非常にポジティブな意味で使っているわけです。しかし、ちょっと考えればすぐ気がつくように、すこし前までは、ローカリズムというのはむしろネガティブな意味をもつ言葉として使用されることの方が、一般的でした。ローカリズムは、多くの場合、閉鎖主義や排除主義とつよく結びつきやすい。そういう意味で、むしろいかにしてローカルなものを打ち破るのか、ということが、例えば戦後日本も含めて、社会科学の基本的なテーマだったというべきでしょう。そして、そうした過去の歴史は、一方ではやはり忘れるべきではないと思います。こうした段階においては、ローカル対グローバルという対ではなくて、例えばアメリカの社会学者マートンが指摘したローカル対コスモポリタンとか、ローカル対ユニバーサルというような対で語られてきた系譜があるわけです。

ここでいうユニバーサリズム（普遍主義）とかコスモポリタニズムといったものを、グローバリ

ズムとは別に、もう一回きちんと捉え返していく作業が必要です。言葉を換えると、ユニバーサリズムやコスモポリタニズムといった方向性をを包み込むようなローカルのあり方というものを、常に反芻しながら考えていく必要がある。そうでないと、ローカリズムは原理主義へと容易に転化してしまうわけです。もちろん、近代のユニバーサリズムやコスモポリタニズムが、実際には、西欧近代のローカルな見方であったという批判には、耳を傾ける必要はあると思いますが。

ローカリズムについての最後の点ですが、グローバルなものとローカルなものが相互浸透する現場を、つねに着目し続けることの重要性を主張したいと思います。国境を越える連関に直接組み込まれた都市は、たんにグローバルな経済機能の結節点であるだけではありません。それは、国家の領域確定力から解き放たれたさまざまなアクターの諸活動が、きわめて差異を含んだ形で噴出してくる現場でもあります。まずそこから学ぶ必要があると考えています。

私自身をふくめ、一般的に社会学者というものは、非常に楽観主義な考え方をしています。いろいろな問題はあっても、現場にいけば新しい可能性を持ったさまざまな試みというのが展開している。それに気が付かないのは言ってみると研究者の方が悪いわけで、そういったものをどうやって拾い上げていくことができるのか、ということを経験的にはいつも考えたいという風に思っています。その場合の一つの目のつけどころとして、「コンタクト・ゾーン」というものに注目したいと思います。

歴史的に切り離されていた人間たちが遭遇し共存を迫られる場所、すなわち、コンタクト・ゾーンでは、異質な人間どうしの多様な相互作用を交わされています。そしてその交わされる相互作用を通じて、人々はそれぞれに振る舞いを即興的に変化させていくこととなります。そこには、たしかに権力関係はあるものの、立ち振る舞いの変化という点では、決して一方的な関係はありませ

ん。こうした即興性や折衷性が、包容力をもった世界都市の文化的特質を支えていく、という風に考えたいと思います。もちろん、こうした場所自体が、しばしば管理や排除の対象にもなってきたことは忘れられないのですが。

このコンタクト・ゾーンという考え方は、外国人と日本人の共生という文脈で考えてきた言葉なので、必ずしもあらゆるケースに適用することができるのかどうか、なお検討の余地はあるでしょう。たとえば、新宿や大久保で起きていることがらというのは、見方によっては、何か差別とか排除とかいう風に語られることもありますし、そういう出来事も少なくないわけです。しかしそうした中でも、いわばなし崩し的に、日本人側もそれから外国人側もどんどん自分たちの生きるスタイルを変えていく状態に追い込まれる。新しい、そして完全に平和な形ではないかもしれないが、しかしいろいろなマナーのようなもの、あるいは、もう少し平たく言うと、ここまでは譲ってもいいという部分と、ここは守るという部分を、うまく使い分ける知恵を獲得しながら、暮らし合っている。

繰り返しになりますが、歴史的に切り離されてきた人間たちが出会い共存を迫られる場所としてのコンタクト・ゾーンでは、例えば一方が優越者で他方が従属者とか、そういう権力格差というものがあっても、いわば現場においては、異質な人間同士として向きあわざるをえないという、そういう一瞬一瞬がつねにあるわけです。権力者であっても、自分自身のやり方を異質性と出会ったときに変えていくということが、ごく普通に行われていくわけです。そういういわば最も原初的な形での出会いというものが生まれて、そこで交わされる相互作用を通じて、両方の人々、さまざまな人々というのはそれぞれ自分たちのやり方を変えていく。即興的に変えていく。こういう即興性とかあるいは折衷性というようなものがいわばコンタクト・ゾーンの特徴だろうし、それは言ってみるとどういう場所でも、どういう関係でも展開し

ているわけです。そういう即興性とか折衷性を、柔軟性や包容力に読み替えながら、いかに捉えて言葉にして、その上でそれらをつないでいくことができるのか。そういうことを個別のローカルな場の中で、とりわけ都市の場の中で考えたり見ていきたいという風に思っています。

そういう意味のコンタクト・ゾーン、それは決してつねに具体的な場、空間的な場であるとは限りませんが、そういったものを許容するような空間としてこの社会が、あるいは都市がどういう風に作られていくのか、あるいはそのためにはどういう条件が必要なのかということを考えることが今の時点ではとくに大事だと考えています。

ちょうど1時間過ぎましたので、ここまでということにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

【以下の討論部分は非常に長くなるため、スペースの制約もあり割愛させていただきます。なお、討論における回答の一部は、論述の補足として、本文中に付加していることをお断りします。】

(文責・町村敬志)

全体として非常に抽象的なのは自分でもあまり具体的なところになかなか降りていけない、問題を含んでいる部分でもありますので、ぜひいろいろご指摘をいただければありがたいという風に思います。それから、一番最後ですが、1枚の表を挙げてありますけれども、これは今、先ほどから述べてきたような大きな変化というのを言ってみると一枚の図にまとめるとどういう風になるのかなということで、ここのところ作ったりしているものですので、参考にさせていただければありがたいという風に思います。

【質疑から】

内海：最初質問とかありましたら、その中で論点のようなものがあれば、出していただいて、それを町村さんに引き取っていただいて、後の方で討論できるような形でひきとりたいと思うんですけども。最初なにか質問とか疑問のようなことで、ありましたら。

早川：都市の再編化、あるいは最後のところで、コンタクトゾーンといていた、そのコンタクトゾーンが都市という中で、都市の機能の空間的なあるいは、そこにすむ人々の機能性というか、そういう風なものがかかなり様相を変えらるという状況だと思のですが、そのときに今までの都市と言う空間領域これがもっと広がっていくのか、もっと小さくなっていくのか、そのところがどう、そのなんと言うのかな、そうありまして、ぼんやり

とした都市空間の領域化というのが行われるとすれば、ヨーロッパだとあれでしょうけど、日本の場合だと、東京から大阪まで、町が続いているところで、どこで区切るかというのは大変ですが、そういう都市を都市として呼ぶ空間領域といものの再編なり、あるいは実質的な再編がおこるのかおこらないのか、と言うことを一つお尋ねしたい。

町村：ここでは都市というのは比喩的にあまり厳密に都市と非都市という風に厳密に分けて使っているわけではない。ただ、都市景気理解として、実際のフィジカルな物理的な都市とそれから、都市的な生活様式とに一応分けて考えるのがけっこう一般的で、例えばその住まい方や景観は農村だが、そこで展開しているいわばライフスタイルが都市的な場合にそれは都市なのか農村なのかということをよく議論して、例えばあと最近だと、田園生活ですね、もう都会はやだと、田園に帰って田園生活をライフスタイルとして行いたい、それは果たして田園生活なのか都市生活なのかということを考えてみたら、それは、私の印象ではそういう田園の形をした都市生活だという風に考えた方が、いいように思うわけです。ですから、そういう意味で今日本全体が都市型社会になってしまっている、どんどん都市になっていう都市化の社会ではなくって、もうすでに都市型の社会になってその意味では、いわゆる農村も都市も含めて、それから都市近郊もふくめて、かなり同じような価値観をもった、あるいは人間関係で覆われてしまっているようなそういう社会になっているように考えています。そういうところに、例えば、新しい外国人の人たちが流入してくる場合に、流入して住む場所というものも、非常に多様になっているわけです。たとえば、新宿のような場所のケースもあれば、一番いま代表的なのは日系ブラジル人の人が住んでいる大都市郊外の工場地帯、埼玉県とか、神奈川県、厚木相模原とか、それから、浜松とか豊橋とか名古屋の近郊というあたりが一番大きな文化的な変化がおきているところで、い

ってみるとそこは都市でもない農村でもない茫漠としたところになるわけですが、むしろそういうところが、今いろんな新しい価値観を生み出す、逆にいうと新しい問題も生み出しているわけですが、そういう場所になっている、という風に思うわけです。一応ここ、都市という文脈で話してきてはいるのですが、あまりそれとは関係なく、いろんなところでコンタクトゾーンが生まれてきているのではないかという風に考えると、一応答えになるんですけども。

早川:抽象的な都市論と都市の概念化という事で、進めていかざるを得ないとおもうのですが、例えば「東京都」というと、今の23区と多摩地区という風に行政的に区分化されますよね、この行政的な区分というのは抽象的な都市論の中では、そういう行政的な区分というのはあまり意味をもたない、というような話だった。けども、その行政的な空間そのもの自身の再編というのですか、あちこち何でしたっけ「はいけんちしゅう」(?)ですか、あういう風なことというのも、抽象的な都市論から行政的な拡大なり縮小なりというようなこともおこってくるのかどうなのか、そういう事がちょっとね、ありえるような気もしたり、あるいは、ゆるやかなネットワークでこういう都市というのか、という風なこともちょっと感じたりするわけですね。

町村:一つは社会生活の様々な領域があって、それがその行政という単位にこうくられてしまう部分と、それから、そうではない部分というのが両方ある、と思うのですね。今の社会が果たしてそういうくられてしまう部分とくられない部分のどっちが拡大している社会なのかということがあろうと思うのですね。まあ印象としては何というか、くられない部分に向かって広がっていく部分が大きくなっている、一つはまあ、市場みたいなものもそうです、それからもう一つは、なんというか、新社会的な基盤ですね、そういったも

のは一つの行政単位でくられないような形で広がっていると思うので、そういう行政という単位にくられないような領域が広がっている状況においては合併とか行政単位の変化というのは、その限りにおいてはあまり影響力をもたない、と思うのですが、ただ、もちろん今現状においても、それから、今様々な問題が起きてくる中で、さっきのセーフティネットですが、それからもちろん介護とかそういうような問題の中でその受け皿としてもう一回行政単位を強めていこう、と。そのために、合併をすることによって財政基盤のより強い、あるいはもっと大きな人材をかかえられる、大きなユニットをつくろうという動きが強まっていますから、そういう部分では合併という動きが今出てきた大きな流れと関係させられてくることは事実だと思いますし、その点はすごく重要な点だと思います。ただ、むしろこの議論の一つのポイントとしては、行政単位ですか、地方自治体も含めて、その単位にくられないような社会空間みたいなものが、はたして可能なのかどうかというあたりが、一つのポイントだったものですから、それで、先ほどのような論点の置き方になった、という風に思います。

早川:なぜそんなことを考えたかっというと、先生のところのゼミ生が横浜のオリンピック候補都市として都市論でやりたいと、うちの学生もそういうものを引き継ぎながら、広域都市というものも都市と考えていいのではないかと、オリンピックの1都市開催っていうものの領域をね、ここでいう横浜が出した案で言えば、首都圏に関わっているわけです。その首都圏を都市という風にしてしまえば、別にあちこちの市や県に関わっていても都市としていえるのではないかと、というような問題提起をしていたものですから。具体的にやれば、行政上の問題、それから派生してくる財政上の問題あるいはそれこそ市民活動も含めて様々な問題そこに絡みますけども、一方でそういうことを自覚しつつもおかつ、そういうことによって

得られるメリットの方が、デメリットよりも大きいのではないかと、と言うようなことを考えていくと、都市そのものの意味というのは、少なくとも近代的に理解してきた都市という、この領域を再編する一つの契機みたいなものがどこかにあるのかなと、こう思って今ちょっとお伺いしたわけですが。

内海：関連して別の論点のことなのですが、・・・
(聞きとれない)

上野：(聞き取れない)感想めいた質問ですけど。

尾崎：今の・・・要はグローバル化における都市環境層に生き残る世界都市というのはどうゆう風に描けるのかなというのが質問の趣旨だと思うのですが、今日出していただいた東京都の支援計画において1986年で国家政策としての四全総が出てきたりして東京をロンドンとニューヨークで8時間時差で・・・する世界金融センターの1拠点とするということ、それで、旧都庁を動かしてあそこに、様々な国際的なビジネスの一つのセンターにするという構想が出てきたということなのですが、ある意味で言ってしまうとそれはまさしくグローバル化と言うこと自体のホントの具体化もない時代に夢を描いていたようなおめでたさもあつたという風に私は今思いますが、それが時代を経るとまさしくその夢を現実にするためには相当な困難をとまってくるという認識がでてきて、というようなことで・・・ではないかと思うのですが、そうするとまさしくこの時に都市間競争ということになってくるかもしれない、そういう夢を現実にするというときに、それが困難だという風に思い至るというそれがそれが一体なんなのかなという私の中では質問自体が・・・。

東京都自体がつまりまあ1980年代国家四全総段階でいつてきたような見取り図というものを現実体的に東京がもう・・・一つの金融センタ

ー世界の経済のセンターになるという見取り図というものがすぐに実現すると考えることが……。非常にその東京都の文章を見ても国際的な都市環境・・・ということにおいては述べられてきていて80年代終盤に述べられてきた見取り図というものもある意味では楽観的なところを自分達で修正しながら東京都の計画というの・・・という風に報告されているように聞きましたので私としてもきびすさんの認識というものの裏にある都市間競争というものがどんなものであり、また、そこで生き残っていく都市、世界都市像という風に、現段階としてどういう風に描かれているかな、という・・・。

町村：その都市間競争という議論はもともとはこのでの都市政治の議論というものがアメリカで生まれたもので、アメリカはご存知のように一つの都市の自立性が強いので、例えばそのプロチームもどんどんひきぬいたり、移転したり、という形で、まさに都市間競争が行われているわけですね。ニューヨークはかなりでかいのですが、でも東京と他の日本都市のような関係にはかならずしもなっていませんから、その意味で競争図式を描きやすい社会、そこで作られた研究者の方も含めて、都市像みたいな都市間競争像みたいなものが非常にひろがって理解されているところがあるということは否定できないと思います。私自身は結論から言うと都市が競争するということはないと思うのですね。都市が競争するというように考えている人はいると、それから都市が競争することによって得をしたり損をしたりする人はいるけども、都市自体が競争することはないと、基本的に住んでる人の立場から考えた場合の話としてですよね。にも関わらず、都市間競争というものが語られて、実際問題としてそれによって経済的な活性化とか衰退とか起きたりすることは事実なわけで、そういう風な回路に向けられてしまう。あるいはそういうのに向かって政策をつくったり、あるいはそれを当たり前だと思ってしまうような

そういう仕掛けというのか、それをもう一回考え直さなければいけない。けどその上で先生がおっしゃったように、都市間競争の話をもう一度行政と同じようなレベルで考えていく必要があるかな、と言う風に思っています。今もう一度それをどうやって崩すかというようなことばかり考えているものですから、どうしてもあまりポジティブな言い方にならないですから、そのようなことを考えています。さっきのあの分権化ですか、石原都政についていうと、ああいうのって非常に矛盾しているわけですね。つまりその分権化ということを中心として、独自の政策運営によって国家の危機を乗り越えるというようなそういう言い方になっているわけですが、けど、もう一方で東京都がこのところずっと強調しているのはとにかく東京は首都であると、もう徹底して首都であるっていうことを手放さないってことをこれまでに強く強調しつづけているわけで、その石原氏が東京を変える事によって日本は変わるのと言い方をする根底にはやはり東京都が首都であるというそういう前提があるからこそ、ああいう言い方が出来るわけで、分権化を強調する議論と、それから、いわば、国家ないし、首都としての東京という位置付けですか、その両方の議論が、うまい具合にというのかな、文脈に応じて使い分けられてしまっているのですから、その辺のことを見ていく必要があるように思います。東京についていうならば。ただ、もう少し一般的に分権化っていうことを考えていくと、例えば東京ではなくて、九州だとか東北もそうですけど、一つ一つの地域が今までの公共事業に依存できない文脈のなかでは、新しい内発的な、あるいは新しい文脈というものを関係のネットワークをつくっていくことによって生き残っていくしかない。そのときに何も東京だけではなくて、九州だったら東アジアとか、と言う議論はよくされていますし、かなりその内実というものはある部分では広がってきているように思うのですが、その部分はまあ、グローバル化という言葉よりも、国境を越える、そういう

意味での新しい動きというのですか、新しい単位、ユニットを構成していくような動きという風に考えた方がいいのかな、そういう意味での分権化というのはグローバル化との関係の中で展開していく。ただ、東京はそういう文脈で言えばとても特殊な、地方でありながら地方ではないというそういう問題を抱えているので、その意味で単純に議論できないところがあるように思っています。それから、一番最初の脱領域化に伴う居場所の問題ですね、これはおそらくこういう議論をする方は同じような印象をもっているし、私も同じような印象をもっているわけで、これに対してあまり、こうだ、と言うことは出来ないわけですが、まあただ居場所はなくなると、ですから脱領域化してしまって、全部ネット上の、あるいはネットワークの中に解消されてしまうような議論というのは基本的にうそだと、だから、そういう議論に対しては非常にある意味で懐疑的です。やはりさっきも繰り返し申しあげましたが、人間というのは生身のからだをもっていますし、生きて死ぬ生き物ですし、少なくともこれを置いておく場所が必要ですし、生きる場所、死ぬ場所は具体的な場所以外ないので、そういったものを、居場所としてどうやってつくるかという問題は絶対に避けられないし、それこそその記憶だけ取り出してネット社会に埋め込むようなそういう人間になれば別でしょうけど、とりあえず50年ぐらいはそうはならないでしょうから、その限りにおいてはやはり脱領域化は重要ではあるけども、でもより重要なのは居場所、もういっぺん新しい領域をどうやってつくるか、という方だという風に思っています。ちょっとこれ以上はあまり具体的にはいえませんが、ですからそういう意味では身体というのかな、スポーツとかそれに限らず身体に関わる議論がすごく必要性を増しているというのは非常に重要なことだと思うし、われわれ、私のような人間ですら、都市研究をやっているとスポーツイベントのようなものに時々出会うということは、その意味で、ただの偶然ではなくてとても

大事なことなのかなという風に思ってます。

岡本：最初の所なのですが、1980年代の都市危機、産業衰退と財政危機、これは何が引き金になったという風に・・・。

町村：これは、全ての都市が危機になったわけではないのですけれども、近代化ですね。一つはヨーロッパや特にアメリカでも語られ、日本でも若干語られたけど、一つは19世紀の後半あたりから近代産業、とりわけ製造業を中心とした産業が勃興して、それを基盤にして、それから、その製造業とくっついた物流ですね、港湾とそれから鉄道になるわけですけども、そういったものの集積として、近代都市というものが富を蓄積していったわけですけども、第二次世界大戦後、脱工業化という流れ、公害問題とか老朽化の問題、それから、先進国の企業が途上国へ進出していくことによって、工場がどんどん移転していくとか、それから、港湾にしても鉄道にしても新しい技術の発達によって陳腐化していくことによって、都市の中心部に、なんとというか衰退する地域が物理的にも生まれてくる、それから同時に物理的な衰退だけではなくて、いわば、そういうところに残ってしまった人たちが、マイノリティだったり、貧困層がそこに堆積してしまって、そういう人を中心に例えば犯罪問題とか、そういう社会的な不安と問題っていうのがよく指摘されたりする、経済と社会的な不安を物理的な条件が悪化すると、その3つが起きてくるのが一つと。それから、財政危機のほうについていうのなら、特に戦後になって福祉国家ということで、そういう低所得層とか、衰退する地域や人々に様々な新しい政策というのが展開していくわけですけども、結局70年代全体として資本主義経済っていうのが非常に危機的な状況に陥っていたなかで、税収入になってしまふ、とりわけ、都市の場合にはもともと税収のもとだった産業がどんどん外へ行ってしまった関係で、余計税収が減少して反対に福祉需要が高ま

っていく。結局、バランスがとれなくなってしまって、財政危機に陥ってしまうという事柄があちこちで起きた。東京でもそれに近い状況が起きた。そういう状況のなかで、どうやってもう一回立て直していくのかっていうことが語られていたと、そういうことです。

内海：ここでいわれているロンドンのドックランド再開発っていうのは、これはニューヨークも含めて、再生キャンペーン、例えば、製造業の再誘致なのですか。それとも商業都市としての再開発なのですか。

町村：そうですね。ドックランドはもともと、マドックですから、港湾施設と一部製造業だったわけですけど、基本的にはここはビジネスセンターとかメディアセンターという新しい金融それから企業サービスを中心とする新しいオフィスビルに作れかえるというもくろみでスタートした。ニューヨークの場合にもおそらく同じような願いですか、東京だったらちょうど臨海副都心に相当する。ドックランドは最初建てただけだけど全然入居なくて、もともとそれを始めた不動産会社がつぶれてしまって、80年代、これは80年代の始めですか、サッチャー政権の始めのころから始まって、80年代終わりとか90年代初めではこれは失敗例として紹介されていたわけですけども、90年代の半ばすぎになって、あらためて立地がすすむようになり、近年では逆に成功例として紹介されるようになった。その場合に、これもお台場なんかと同じなんですけども、単なるビジネスセンターというよりも一種の都市のリゾートですか、文化的な施設を呼び込むことによって付加価値を増していった、生き残っているっていうのかな、成功の事例に転じているという風に言われているので、この辺は今の都市、単なる金融とかいうことだけではなくて、文化とかまさにスポーツですか、そういったものも含めた要素というのが、都市の活性化を考えていく場合にはとても大事な要

素として位置付けられていく一つの例なのかな、
と言う風に見てて思ったりしています。

内海：常々ずっと疑問に思っていたのですが、
脱工業化社会論とグローバル化論という
のは、どういう関係があるのですか。つまり、今
お話でね、多国籍化して行って、先進国の製造部
門がどんどん途上国に移転してますよね。それ
による世界全体の生産力自体はおちないけれど、
先進国の製造部門はなくなるという意味では、先
進国の大企業の収入自体は減らないけれども、そ
こでの失業問題は大変になっていく、それで福祉
国家うんぬんが危機になっていくのだけでも、だ
から、そういうなかでの脱工業化社会論というの
はどういうことを意味したのか、私もちゃんとや
ってないのですが。

町村：脱工業化社会論自体は明らかに先進社会だ
けを念頭においた非常に偏った表現ですね。地球
規模全体でいえば、脱工業化は全然してません。

内海：ですよ。だからそれとね、グローバル化
の理論上の、社会学の中でどういう風に
こう、つまり、グローバル化の方がその
ままきたわけですよ、そのあたり、関連とい
うのはないですか。

町村：すごく本質的でかなり大きな問題、近代化
とならんで、やはりその問題をどう考えるか、と
ても大きな問題だと思います。触れている例とし
ては例えば先ほどのサッセンですかサッセンの議
論の場合に、一枚目のサッセンのところをご覧
ただけますでしょうか、国際労働力移動・移民研
究からの出発というところからですけど、サッ
セン議論のすごく評価が高いところというのは、先
進国の多国籍企業が自分達の地域に工場をつくら
なくなった。その代わりに、発展途上諸国に直接
投資という形でお金・資本をもって行って、工場
を建てるわけですね。その結果として、途上国の
工業化が進むと、そうすると、何が起きるのかと

いうと、従来第1次産業を中心に働いていた人た
ちが、自分達の仕事を捨てたりして都会に出てく
る。ある部分は、女性なのですが、現地労働
者として、工場で働くわけですが、ある部分
男性を中心にした層と言うのは本国を離れて、も
う一変先進国の大都市に貫流していく、というか
流れていく。ですから、先進国自体は脱工業化し
て行って、途上国は工業化していく。一見バラバ
ラに見えるのだけでも、その連鎖って言うのは
移民の増大、それから、移民が先進国に流入して
くることによって、間接的に影響を及ぼしている
という点に着目して、そういう流入してくる移民
層というのが、いわば新しく肥大化していくサー
ビス産業のもっとも底辺部分をささえる低賃金労
働者になるっていうのが、すごく大きな見方で、
つまり、先進国と工業国、それから、サービス業
と途上国の工業というのが全部連鎖して行って、
全体として問題点を引き起こしたということを主
張したという点が一番優れていた点だというよう
に思っています。

まだ、あの半分議論で質問……………。

関：……………ですけど、2ページの3 - 2の……………。
最初のところで、グローバル化の実態的
なものっていうこと……………てありますけど、ち
よっとその、……………も実態的のものっていう言い方
をしていたものですから、ここをもうちょっと説
明していただきたいんですが。これは都市空間と
いう前提ですか。

町村：いえいえ、ちがいます。グローバル化
一般として、こういうことはあまり言われて
いないというか、こんないかげんなことをいっ
ているのは、あんまり、数がすくないものでは
から、これ自体、多分なかなか、要するにグロー
バリゼーションというものは一体何なのかという元
の定義ですね。我々すぐ市場とか言う話にいつ
てしまいますけど、例えば、ギデンズにせよ、それ

から、スチュワート・ホープとか、そういう人にせよ、もともと遠く離れた人というのが、お互いに何となくつながっているという風を感じるようになるという事柄がグローバル化なのだと、言う風にあるいはグローバル化の元の根本的なあらわれ方なのだという風に、言っているわけなのですね。これは一見とても抽象的で大事ではないような気がしていたのですが、いろいろ考えていくと、やっぱりそのぐらいのところから戻って考えていかないと、グローバル化というものは非常にこう場合によって狭くとらえてしまう。本当の影響力を理解しないまま、ただ単に市場の話だけに限定して理解してしまったり、することもあると、その意味でもういっぺんグローバル化というのをひろくゆるく、あるいは我々の個人的な体験のレベルで考えていく必要がある、と言う風におもっているというのがまず出発点になっています。その上で考えていくと、例えば僕は、果たしてグローバル化というものをリアルなものとして考えているのだろうか。あるいはグローバルな社会です。つまり遠く離れたものが相互に関係し合っていると、そういった事柄がほんとうに自分のリアルな経験としてわかっているのか。あるいは、それをほんとうに自分自身で信じているのか。グローバル化ということを行っている人はいるし、何となく説明されると、多国籍企業見ても、何見てもそうなのですが、あるようにおもえるのだけでも、それはそれとして、もう一回一人一人の体験のレベルとしてグローバル化とは何かということを考えていくと、そうすると、グローバル化というのを何か具体的な組織とか、あるいは、具体的な変動みたいなものに、直結してしまって理解してしまうというのは、あまり正しくないというか、見誤ってしまうもとはいかと、そういう意味では具体化というか、そういう形ではなく想像力の問題として考えていくべきではないか。ここでは述べているわけなのですが、ちょっとあまりうまく申し上げることができ

ないのですけど。

鬼丸：その話今日聞いていて一番意外っていったらあれですけど、……実は一番最後の所のグローバル化の……って言う風に書いてますね。この部分を……一応そういう風にあつたんですが、そうではなくて、言説としてのグローバル化、イデオロギーとしてのグローバル化というところに非常にまあ……がはいっている、そこが、かなり意外な感じがしたんですけども、って言うことはグローバル化という言説があつて、グローバル化という現実があつて、グローバル化という言説がある、と言う理解ではなくて、グローバル化って言うのは1個の言説であるという風に理解しているのですか。

町村：今まさにおっしゃられたように現実としてのグローバル化と、言説としてのグローバル化という風に分けるのがふさわしいと思います。その両方があるのだという風に、とりあえず思いますけども、現状で語られているグローバル化というのは、どちらなのだと、いったことを考えた場合に、じゃ、現実のグローバル化とは何かということを含めて、非常にあいまいなのです。大きな意味で、さっきも、戻りますけど、遠くはなれた人たちが、私も含めて、何かの形で相互に関係しあっているという認識は強まっていると、それ自体は事実ですから、その意味では実態としてのグローバル化というのは進行しているのだという風に思いますけど、そういう形のグローバル化の議論と、それから、今いわれているグローバル化というのがずいぶん落差がありますよね。実際には、市場とかねそういう文脈のなかでグローバル化というものを捉えて、推進派も反対派も語っています。それ自体は軽微な問題ではないので、それはそれとして、かなり実態にかかわる議論として理解していく必要があるわけ

ですけども、例えば、そういうものにあえて対抗していく場合です。同じ土俵にのってしまったら、逃げ場がなくなってしまう議論だという風にグローバル化を、思うわけですね。今の実態的なグローバル化については、そうではなくて、グローバル化っていうのが、いわば、さっき述べていたような形で、様々な形で想像力として作られていくようなものだ、と言うふうな形で、どこかグローバル化に穴をあけていかないと、特定の想像力だけに飲み込まれてしまう。そういう危険性が強い概念じゃないかと、その意味で、実態としてのグローバル化という現実としてのグローバル化だけではなくて、言説として生産されているグローバル化、あるいは、グローバル化という言葉そのものを、もっと対象化して考えていく必要がある、という風に今は考えている。一つは私自身もともと実態的なグローバルな相互連関ですか、経済とか政治とか、そういうなかで、都市がどうかわかっていくのかという形である意味で、実態的に考えてきたことは事実です。そうやって、考えていくうちに、だんだん、心境の変化というか、つまり、そこで語られていることの底の浅さですよ。グローバル化という言葉で語られている事柄がいかにか、一つは・・・政治的に生産されているか、ということ、いろいろみるにつけ、それから、そこで語られているような現象を何とかして、乗り越えたり、相対化していく必要があるという風に考えていく中で、そこに穴をあけていく場合に、かつ、同じ土俵にのらないけれども、でも、グローバル化という事実そのものには背を向けないと、そのためにはどういう風にグローバル化を語ったらいいのか、というあたりで、とりあえず、今こんな風に語っているというそういう状況にあるわけなのです。

内海：今おっしゃられた具体的なけっしょう(?)がね、この越境者たちのロサンゼルスというグロ

ーバル化とローカル化の具体的な都市ということで、私はこれをね、そういう位置付けでよろしかったのですか。

町村：そうですね。そういうことをやったり、考えたり・・・感じたりっていったほうが良いでしょう。しながら、もう一回、一人一人のレベルからグローバル化みたいなことをどういう風に考えていくのか、決して背を向いてはいけないと思う。一方でグローバル化に背を向けていきなり、ナショナリズムとかに向かってしまいそうなそういう動きがありますから、そうならないためのグロ・バリゼーションというのはどういう形でありえるのか、対抗的な想像力という風に、カッコよくいうとなると思うのですが、そういうものとしての余地を残しながら今行われている支配的な・・・としてのグローバル化論というのを批判していく、対象化していく必要があるという風に考えています。

上野：町村さんローカル化というのはあるの。

町村：はい。いろいろ見て、ローカリズムとかローカライゼーションという言葉はやはり使われているようです。

上野：それはどういう風な文脈で使われているのか。

町村：日本語でむりやり翻訳すると、地域主義というよりは、むしろ、極域主義というのでしょうか。広がっていくようなモーメントではなくて、自分の生活する基盤や身体を中心とした領域に、物事を修練させて考えていくような、そういう発想法というのですか、そういう考え方という意味で、必ずしもローカリズムの行き着くところが地域というわけではなく、もうちょっと今は多様に使われているように思うのですけども。

岡本：ベクトルとして求心的な・・・そういうイメージ・・・

町村：そういうイメージが強いです。

尾崎：価値判断としてポジティブかネガティブかっていう、使われ方としては。

町村：どちらかというやはりポジティブに使う、今はやはりグローバルな文脈に対してどうやって対抗するかという部分が多いですし、私の中でもそうですから。やはり、意味付けとしてはポジティブなプラスのイメージで使っているケースが多いとは思いますが。ただ、もとは中立的だと。それだけにさっきあまりローカル、ローカルって言っていたら、さる年長の先生から、ローカルをつぶすために自分は研究してきたのだ、って言う風に言われて、町内会とかね、そういう地域レベルの、なんていうか(・・・研究ですか)・・・みたいなものを、壊すためにやってきたのに、なんでいまさらローカルなのだということをいわれたことがあります。言いがかりではあるけども、でも、確かにそういう危険性というのかな、そういうことは確かになくはないわけです。

鬼丸：ちょっと、話が共通しているかわからないのですが、スポーツの場合、グローバル化という言葉は90年代言われてきた言葉で、そのスポーツ企業というか、スポーツのウェアとか用品のグローバル化とか、それから、スポーツする・・・選手だとか、観客の移動、をもってグローバル化ということにしたり、そういう意味ではいろいろあるのですが、基本的にはグローバル化をもっとも象徴するのは、メディアのグローバル化ということで、グローバル化を最もよく体現しているのはメディアにおけるグローバル化、だから、それが、いわゆるここでいうイデオロギーとしてのグローバル化を表象して

いる。だから、それを支配しているのは、資本、メディア・・・、非常に少数なメディアがスポーツを見せる力をもっているわけですね。それに対してどういう風に対抗していくか、ということで、スポーツにおけるメディアの・・・を考えていく必要があるわけです。それを、先ほどみたいに、メディアだけではなくて、メディアの公共権(?)と地域のスポーツ活動というのをいかにつなげていくかという視点が非常に重要だと思うのですが。その地域というところに根をおろした場合、もともと、地域というか都市とスポーツという考え方に非常に密接な関係が、スポーツは都市の中から生まれてきているという風に言われてはきたわけですが、日本の場合にはスポーツの主体として都市というのがいたという、そういう伝統というのではなくて、いわゆる企業と学校がそれを主体として・・・ですね。けども、この間の変化というか、会社の方もスポーツに関わらなく、自分の体力もなくなって、スポーツクラブを廃止している。学校のほうもだんだん子供が少なくなってきているから、スポーツクラブを自分達でできない、という中で、都市がスポーツの主体になるという状況はそろってきているわけです。それはそれで、もろ手を挙げて喜ばないかということ、そうではなくて、文部省もみんなこれからは都市でやりましょうと、どんどんNPOをつくって、それで、みなさん地域で参加してやってください、と非常に、なんとというか、上のほうからやられている都市スポーツというか、地域スポーツの振興という状況があるわけです。それに対してそれをみんなやろうという風にやっているわけです。だから都市とスポーツというものが非常に問題になってきたのですが、それに対して非常にいろんな力が交錯していて、いかにそれを上から導入していくスポーツクラブではなくて、いかにそこに本当の住民・市民が主体となったクラブを作っていくかが問題になるのですが、それをいかにしていくかというのが、こちら側の課題でもあるわけです。そのときに、メデ

ィア・・・っていうのがいかに関係してくるかということがありますが、最後のところで、先生が対抗として地域と都市と考えたときに、このコンタクトゾーンっていう風に言われて、それが非常に、先生の場合いろいろな、人種なら人種、民族なら民族というのがあるとは思いますが、そのときにこうしたコンタクトゾーンを許容するような空間をいかに都市の中で見だしていくか、ということをやられています、そういった空間のイメージというか、空間と言う言葉が非常にわかりにくい。それが社会とか制度ではなくて、コンタクトゾーンを許容する制度をいかにつくっていくかということではなくて、コンタクトゾーンを許容する空間を目指していくか、こういったアプローチをしていくのか。

町村：その答えがでたらこれもまた、書いているのですけど、まああの、

鬼丸：それで、コンタクトゾーン、概念のその違いがあるのですけど、ひとつの場所であるという風にいわれて、この場所を共有する空間という風にして、場所と空間ということを違う風に言われてますよね。その違いは。

町村：そうですね。それはおそらく一般的に使われている、場所と言うのは一人一人の、あるいはある求心的な広がりですね。自分とか、身体とかを中心に構成されているようなある広がり、空間というのはもっと均質で中心をもたないようなもっと茫漠な広がり、という風に考えていて、そういう茫漠たる広がりの中から我々は自分を中心にあるいは何かを中心に、求心的なある広がりを切り取って行って、それを場所とか居場所という風と呼んでいるわけです。一応そういう風に場所と空間使い分けています。ちょっと逃げになってしまいますけども、今、これは先進国の都市という風に限定して考えないといけないと思うのですけど、たとえば、この都市において、セキュリティ

の問題ですか、その治安とか監視ですよ。ビデオで監視するとか、そういう安全とかっていう問題がすごく触れられるようになっている。もちろん危険な都市よりも安全な都市のほうがいいわけで、われわれはビデオで監視されることも許容してしまってますけれども、でも、そういう形でヨーロッパにしてもアメリカにしても日本にしても、都市という空間がそういう風な意味で、セキュリティとか安全とか監視みたいなものにすごくこう思考するようになってしまっている、その背景としてなんというのか、都市が果たしてきた役割というものが、大きくいうと近代から脱近代にかけて変わっている。近代化の課程では言ってみると都市というのは、その非都市的な空間、農村や田園や海の向こうの国からやってきた移民たちとか、そういう人たちが都市にやってきて、そこで新しい生活の規則とかマナーとかそれから価値観みたいなものを近代的な価値観それから西洋的な価値観として身につけていく。そのプロセスでコミュニティみたいなものを構成していくという形で、いわば、自分たちのふうあいとか考え方を改造していくようなそういう場所としてあって、それをこう可能にするように、都市自体は広がっているが、その中で個別のコミュニティができあがっていたわけです。だからコミュニティの一瞬のモザイクみたいな形で都市が出来上がって、そういう意味で、一つ一つの都市、都市全体は危険でもそのコミュニティ自体は同質的な人が集まって、安全な場所として構成されていてその意味で、安全・危険という言い方をすれば、ある意味で安全な場所として成立したのが、今の都市はそういう意味で、非近代的な身体が近代的に作り変えられていくとか、新しい価値観によって作り変えられていくような場所ではなくなってしまっていて、その意味では、もっと何であんな人が出会うのだという、同類のものが同類と結合するような社会ではなくて、同類の人がむしろ都市の外に、郊外社会に均質な集まりをつくってしまっていて、とりわけ、都市の真中というのはそういう均質化さ

れたコミュニティをつくるそういう動きから排除された、あるいはそれを拒否した人たちがすむ場所になっていて、その意味で、言葉の正しい意味でいろいろな違ったものがコンタクトするようになってきてしまっている。要するに見たくないものが見えてしまったり、ホームレスとかそれから、行きたくてもいけないような場所が危険な場所として、みんな括弧つきですけどね、としてつくられていく。支配的な価値観を生きているつまり一般的な人たちはいわばそういったから何とかして身を守ったり、そういったものを隠してしまうというような形で都市をつくろうとしていて、その結果として、安全とか監視とかいうものに対してとても許容的になってきているし、それ抜きではなかなか暮らせないようになってきている。その意味で都市というのは、いろいろな違ったものが以前よりももっと今、それから、これからは、もっと露骨な形で露出してぶつかりあうというそういう場になってしまうという可能性が高いと思うのです。それ自体はあまりよいことではないと一般的に思うのですが、逆にいうとそういうところでこそ、今出てきたコンタクトという事柄が非常に生の形で進行するわけで、そういうところですら新しい価値が生まれ出せない社会だったら、全体として新しい価値なんか生まれえないような気もするし、そういう最もこう危なかったりぎりぎりだったりするところこそ、いわば、今の社会を変えていくような新しい価値観のようなものが生まれてくるという、そういう思い込みがあって、それで、こういう言葉をもう少し言論も含めて考えていきたいという風に思っていることです。私はあれは完全に学問的な言葉ではなくて、思い入れで語っているようなところが強いのですが、そんなことを考えていまして。

鬼丸：こういったそのコンタクトゾーンで、そういう風にして相互作用しているというときに、変化させていく、そういう変化させていける人間というのは、エリートが少数派であるのと同じよう

に、そこでコンタクトゾーンで変えられる人間と
言うのもかなり少数派であるのでは。

町村：これは、いろいろな見方が、もちろんそういう見方もあるのだと思いますが、たとえば、何かいきなり具体的過ぎて例としてよくないのかもしれないかもしれませんが、たとえば、大久保とかそういう非常に近くで起きていることがらというのは、見方によっては、何かこう差別とか排除とかいう風に語られることもありますし、絶対ないわけではないですけども、でも、もっとなし崩し的にいわゆる日本人側もそれから外国人側もどんどんスタイルを変えて新しい決して平和な形ではないけれども、いろいろなマナーみたいなものを、マナーというところとちょっとよくないかな、ある種、こまでは譲ってもいいというところと、守るべきところと、うまく使い分けながら暮らしている、というのか、ただ、ああいう大久保みたいな街自体が、日本人にとってすみやすい街かというところとそうではないと思うのでね。ですから、手ばなしでいいとか悪いとかいう話ではないのだけでも、だけど、そこをいやだと思っている日本人にしても、それから、最近中国系とか韓国系の人もすごく数が増えて、たとえば、韓国系の人に話を聞くと、あそこはもう韓国人が多すぎていやだという人がいるくらいもっと日本語がしゃべりたいのに、韓国語だけで、用が足せてしまうというそういうようなリアリティも外国人の中でも生まれているわけで、その意味で、単なる日本人、外国人ではなくて、もっともっと多様な人たちのあられかたというのが接触を通じて生まれてきているように思えるので、そういうことを一つ一つ拾い上げて何していか、そういう中で、こういう空間のふところみたいなものがもう少し見えてくるのかなと思っているわけですけど、ただこう、外国人のケースというのはわりと、わかりやすいケースでね。研究者のほうがそういう目で見ているからそう見えるという部分もあるわけで、むしろ、今だったらこうがい社会とか、今こうがい社会がす

ごく盛んですけれど、そういう一見同じような価値観をもっている、だけども、世代とか若者とか、それから同じ会社に勤めていても、どんどん振り分けが進んでいく中で、そういう一つの現場で同じように見えて実は違っていることに気が付く瞬間がだんだん多くなっているわけですね。そういうときにお互いどうやっていっしょでいられるかという事柄なのかなという風に基本的には……ですけれども。

関：そのイメージをもうちょっと具体的に考えたのですが。その場合に、都市の歴史の中で、その累計みたいなものはどういうものをイメージしているのですか。あるいはそんなものは一切なかったのですか。現在それが求められている、自分のイメージはこうだっていう、そういう風に思うのか。

上野：まあ、歴史的にもうすでに実際それは……

関：もし、そういうイメージを浮かべるにあたって累計が歴史的にあるのであれば、お考えなのか、ちょっとそのあたりを。

町村：一般的・・・、どんどん言い訳になってしましまして、すいません。そもそもっていう話をすれば、都市というのはもともといろんな素性が違う人が集まって住む場所なので、そういうような形でコンタクトゾーンですか、ここでいう、そういったものが、自然な形で生まれていた場所だっただろうと思いますし、それから、例えばどんな趣味が違う人間でも、自分の居場所というのをどこかに見つけることが出来た。だからこそ、都会というのはどの時代にも住みにくい場所として語られてきているにも関わらず、なぜか人はどんどん、どんどん都市に集まりつづけているのはやはり住みにくいけれども、自分の居場所を見つけられるからだと思うわけですね。だから、その意味で都市には潜在的にはそういう可能性がある。

累計の問題は別にして、そういう可能性はあるのだという風に思います。都市研究しているので、これは思い入れ・・・、ただその中で、そういう特徴をやはり、より豊かにもっていた都市と、それからおそらくそうではない都市というのは当然累計の議論としてあるように思います。あまりここで、すぐには出てこないのですが、例えば、近年かな、都市下層というところであれですけれども、実際ホームレスの研究、実際今隅田川のところに行くと、川沿いの堤防のところにもうダンボールハウスが、前、去年の4月数えただけで、舟下りですか、数えたら、両岸に達して、佃島から浅草寺のところまで、だいたい指折り数えるだけで、400～500くらいのダンボールハウスがそこに住んでるわけですよ。だから、それだけのことが今東京でも起きてしまっているわけで、そういうことを実際みんな研究したりするわけですが、そういう中で、もう一回、歴史上の都市下層というのかな、下層の人がくらしていた、そこには下層の人だけではなくて、もっといろんな人が実際には住みあっていたわけで、そういう経験みたいなものをもういっぺん何かのかたちで学んでいく。もちろんそこには差別とかもっとたくさんあったわけですが、そういうような事柄なんかも今を考える上で、結構有効なのかな、という風に思います。ちょっと累計っていうことではなくね。

内海：ある意味ではそのあたりはここで提起された問題をわれわれの領域で肉付けしていくというのが問われているのかなと、私はずっとお聞きしていました。

尾崎：あの感想的なことで、コンタクトゾーンがあって、私が社会教育のほうでこれをお聞きした時に・・・、外国人の学習権保証問題ということで、それと重ね合わせて聞いていたところなのですが、例えば、川崎などでは、かなり外国人労働者として入ってきた人たちの学習権というか、

日本語をどうやって教えていくのかということが、かなり草の根から……でやってきて、あそこは公民館ありません。市民館という名前でやっているわけですが、そこが考察している、定期的に職員がさまざまな相談に乗っていくとかたちでやっている。そういったことを通じて外国人であっても日本に住んでいるということにおいては大人が学ぶという権利を保障するということがやはり適用されるべきではないのかという議論が進んでいて、全国各地でも取り組みがなされてきているわけで、そのことは、ひるがえって引き取っていけば、大人の学ぶということの権利問題とか公共的にそれを支えていくということの意味は何であるかということまで、引き取られていくということがあるかと思えます。それはある意味では、今日の言葉に引っ掛けて言えば、グローバルスタンダードによろやく日本がおいついてきたという、ただそれはもちろん植民地をかかえていた先進国がとがざるを得なかった問題ですね。移民に対してどうやって母国語を教えていくのか、順応させていくのかってということだったわけですが、ただ、……の形態含めて経済の先進国になった日本が、その中で、背負ってきた外国人にどうやって学ぶこと、それがひいては日本人に対してどうなるかということなのですね。今川崎で言えば、やはり、そうすると川崎という都市の歴史というのも関係してくると思うのですね。在日の問題もずっと抱えてきたり、あるいは、民間レベルで設備面というのが非常に長い歴史をもっていると、あとはまあ、政治レベルでいえば、組合運動つよかったり、あるいは、革新自治体がいまだに続いているというさまざまな複合的なこともやって、そういうことがでてきたんだろうと、あそこは外国人の任用も進んでいるということになっているだろうと思えますので、そのコンタクトゾーンというところが例えば、日本語話を話せない外国人の労働者と市民とのコンタクトから始まったのかな、それがいろんな意味での問題を提起しているのだろうなという読み方で、コンタクト

ゾーンの成立というのは、今のところは、自分の問題・関心としては、すごい感じたということですね。

町村：あまりフォローしてないのですが、日系ブラジル人の人たちが地域社会とどうなじんでいくかというときに、最初のころはサッカーが例としてでてきていて、でも、最近はまだそれを乗り越えてもっと大きな広がりになっているので、あまり報道もされないのですが、そういう研究はあるのですか。もう日本国内には30万人の日系ブラジル人の人が住んでいますから、自前の学校までもってます。そのへんでどういう風に内部で、それから、接点でどんなことが起きているのかというのはすごく興味があるし、やはりスポーツという意味では言葉の壁を越えてまさに接点になりうるいろいろな意味での特徴をもったものだと思うので、その辺で利用する人もいるでしょうし、それから、もっと積極的につみあげていくような動きもあるでしょうし、すごく興味深いところなのですが。

尾崎：あるとすれば、市民館で言えば、各国の料理で、とか民族舞踊でということは聞きますが、そういう意味ではあまり……

内海：まあ、実際やっているでしょうけども、研究が遅れているのですね。

町村：あ、ぜひ……

早川：最初のグローバリゼーションとは……とあって、きわめて政治的な過程であると、いう風にいったことの裏返しで言えば、ローカリゼーションっていうことはやはり極めて政治的なものという風な、そういう対概念っていうのかな、包み込まれた概念……

町村：決して悪い意味での政治ではなくてある種、

理念みたいなものをもって自分自身の方向感覚をもって、提起していくものだという風に、やはり思います。そういう意味で政治的なものだと、広い意味で。

早川：むしろ、まさにローカルだから、生活の地に根ざしたというか、そういう問題として考えていくことと、つまり生活者として考えていくことと、かなり抽象的な政治レベルでものを考えていくことによって生じてくる様々な作用の増える問題というのをこの二つから考えていこうということなのでしょうかね。

町村：そうですね。生活者として今いったように現場から考えていくということも、一種の政治だと思うのです。それからもう一つは、ローカリズムとかいう、地域で解決する、地域でやっていくという場合に、やはりいろいろな意味が地域に盛り込まれてしまうわけで、やはり政治的な利用、それこそ、石原都知事ではないですけど、ああいう文脈の議論まで含めて地域に盛り込まれてしまいかねないというのがすごくやはり今の日本においては依然としてあると思います。その辺もふくめて、誰が地域という言葉で定義するのかということをめぐる、実際には、何というか、政治過程みたいなものが、すごく重要になってくるように思いますけど。

上野：あの、理解を確認するために、今日の町村さんの話を聞いて、私自身の極めて簡単に要約をやらせて。こんな要約だとちょっと誤解していると思われるとあれなので。経済的な過程としてのグローバリゼーションというのかな、しかしこのローカルの場によって……そのグローバリゼーション……実態的なね、あの、……経済というのは……そのローカルというところで政治的な過程……その辺については今のグローバリゼーションの建設……していくと、イデオロギーとして、支配層に都合の

いいような人間にしようとしている。つまり、グローバルスタンダードの……競争力に……だとか、そういう意思改革というか、かれらにとっての、……という局面と、一方その地域、ここでの政治という点でいえば、……あるいはその……自ら主体的にそれを……というそういう意味での政治的な意思決定を……がやっているというその新たな場という、そういう風な理解で……。

町村：ですから、金子勝さんですか、は反グローバリゼーションとってしまうのですが、それを一辺とめてね、それで、反グローバリゼーションをグローバリゼーションとして、想像していけるような形にしていけないと、多分、金子さんはそういう風に思っているんじゃないかな、そういう対抗的な想像力をグローバリゼーションの議論の中に盛り込んでいけると、いけないのではないかと。その点ではまさにおっしゃるとおりです。あの一橋大学にね、今日の午前中にも教務委員の関係で動員されて、それで、フランスのビジネスアシュール(?)、そこ今ずっと提携を結んでいるわけですけども、先方のほうからもっと踏み込んで提携したいと、世界中のMBA コースはみな競争しあって学生集めて、特に外国人の学生が来ることがステイタスあがるシンボルなので、ぜひフランスの我が校にも一橋からもっと人を送り込んでほしいという売り込みだったのです。だから、大学もそうなるな、という話で。

内海：いろいろ議題はだんだん出てくると、お互いどんどん質問したいことあるのですが、これを機会に個人的にも町村さんと接触をとっていただいて、これからいろいろよろしくお願いします。今まで以上にお世話になるかもしれませんが。